

広がる活動の輪

自然研は今後、地域の市民団体と協力して活動を広げていく予定です。

四日市市内の緑地を管理しているNPOから、フクロウの巣箱をかけたたいでアドバイスをほしいとの依頼がありました。巣箱の数をこれ以上増やして適切に管理していくことは、自然研だけでは不可能です。いろいろな団体と一緒に活動して、繁殖支援の輪が広がり、自然環境に配慮する地域や場所が増えていくことが理想です。

2018年には、自然研・東芝メモリ(株)四日市工場・三重県・四日市市いなべ市・菟野町の六者が、「フクロウ保護プロジェクトの推進」のために、みえ生物多様性パートナーシップ協定を締結しました。

さらに、日本鳥学会で研究発表するようになって、大学の研究者から声をかけられるようになったといえます。



▲第52回全国野生生物保護実績発表大会で文部科学大臣賞を受賞



▲2018年に「みえ生物多様性パートナーシップ協定」を締結

「調査結果の発表やフクロウについての講演を行うと、フクロウだけを守りたいのか、と質問を受けます。」と丹下先生。生きていくには、多様な環境があり、エサとなる動物が豊富に生息する昔ながらの里山環境が理想です。しかし、近年、人々が里山を利用した生活をしなくなって里山が荒廃し、また、開発によつてフクロウの生息



▲日本鳥学会2018年度大会でのポスター発表のようす。ポスター発表高校生部の最優秀賞を受賞。

北海道のシマフクロウを研究している大学の技術的な支援を受けて、自然研は「フクロウの見守りサイト」を運営しようと、現在準備しています。

また、他の種類のフクロウの研究者から、情報提供や研究協力を求められるようにもなり、その結果、「ペリットのDNA解析」も視野に入れるようになりました。

フクロウをシンボルとして

「調査結果の発表やフクロウについての講演を行うと、フクロウだけを守りたいのか、と質問を受けます。」と丹下先生。



▲フクロウ保護プロジェクトロゴマーク

に適切な環境が極端に少なくなっています。それでも

フクロウは残された自然で強かに生き続けているのです。そうした場所には希少な動植物も生き残っていることが多く、私たちはフクロウをシンボルとして保護活動を実践するとともに、フクロウを守ることでその地域の自然を守ることにつながりたいと考えています。」

フクロウ保護プロジェクトは、保護、研究、教育啓発という三つの活動が密接につながって成果が上がっています。安易な巣箱かけは繁殖を阻害するといえます。自然研はフクロウの生態や人との関係を深く理解した上で、活動し啓発することを大切にしています。

また、多くの人がフクロウに興味をもちフクロウを通して地域の自然に目を向け、その自然を大切にしてくれることを自然研は願っています。そして、この活動の輪が広がり、より良い自然環境が育まれ、次世代に引き継がれていくことを目指しているのです。

丹下先生はフクロウがすむ森での子どもたちの自然体験についても語ってくれました。「子どもの時の自然体験はとても重要です。探究心や課題解決能力が自然と身に付いていきます。そして、幼



少期の体験を通して身についた自然を大切にしたいという思いは、一生変わらないと思います。子どもたちが成長とともに自然から遠のいた生活を送るようになったとしても、いつかまた、自然を守る活動を応援したり、自ら活動を実践したりしてくれることでしょう。

私たちの住む町にフクロウがすみ続けられるような多様な自然環境をつくり、いつまでも子どもたちの遊び場となる自然体験が重ねられ、自然の多様さ・大切さを学ぶ場が継承されていくことを願っています。」

卒業後、自然研で得た知識や経験を、地域活性化の活動に活かしていきたいという部員もいます。高校の部活動がその後の彼らのライフワークとなり、地域の自然を守る担い手となってくれることを期待します。